

古事記上巻稻葉之素菟譚の仕組み

——物語の構造を分析する方法——

古事記上巻の所謂「いなばのしろうさぎ」のエピソードについては、鈴木1989に代表される原典本文中の「素菟」の訓をめぐる論考、神田2009の「裸」の菟に対する八十神と大穴牟遲神の対応の位相を医学的な側面から考察する解釈などが注目されるが、ここではこれらの問題や見解に注目する以前の基礎的作業として、このエピソードが、古事記全体の中でどのような役割が与えられて「物語」を生成しているかの確認作業をしようと思う。

一、所謂「出雲神話」の物語構造

作業対象となる古事記原典本文——漢字文は真福寺本の本文をベースに兼永筆本、度会1887、本居1803と対校の上、字体を電子テキスト用に変更したもの。訓点は志水試訓——は次の範囲である。

此神、娶二刺国大神之女、名刺国若比売、生子、
大國主神。亦名謂二大穴牟遲神以牟遲言。一亦名謂二葦原
色許男神以音。一亦名謂二八千矛神。一亦名謂二宇都志國

志水義夫

玉神字都志三。并有二五名。故、此大國主神之兄弟、
八十神坐。然皆國者、避於二大國主神。一所以避一者、
其八十神、各有欲レ婚レ稻羽之八上比売一之心上。共
行二稻羽一時、於二大穴牟遲神一負レ俗、為二從者一率往。
於レ是、到二氣多之前一時、裸菟伏也。尔八十神謂二其
菟一云「汝將レ為者、浴二此海塩、當二風吹一而、伏二
高山尾上」。故、其菟從二八十神之教一而伏。尔、其塩
隨レ乾、其身皮悉、風見二吹析一。故、痛苦泣伏者、
最後之来大穴牟遲神見二其菟一言「何由泣伏」。菟答
言「僕在二淤岐嶋」。雖レ欲レ度二此地一、無二度因。故、
欺二海和迹此二字以一言「吾与レ汝競、欲レ計二族之多
少」。故、汝者隨二其族在一悉率来、自二此嶋一
至レ于二氣多前一、皆列伏度。尔、吾蹈二其上、走
読度。於レ是、知二与レ吾族孰多」。如此言者、見
欺、而列伏之時、吾蹈二其上、読度来。今將レ下レ地時、
吾云「汝者我見レ欺」。言竟即伏二最端一和迹、捕レ我

悉剥^{こころはく}我衣服^{われえふく}。因^よ此泣患者^{これになくるやま}、先行八十神之命^{さきにやそかみのめい}以^{もつ}誨^{おし}告^つ。浴^う海塩^{かいえん}、当^{あた}レ風伏^{ふうふく}。故^{ゆゑ}、為^なレ如^{ごと}レ教者^{けうしや}、我身^{われみ}悉^{こころはく}傷^{やぶ}。於^{こゝ}是^{こゝ}、大穴牟遲神^{おほあなむぢのかみ}、教^{おし}告^つ其菟^{そのう}。今急^{いまきふ}往^い此水門^{みづかど}、以^{もつ}レ水洗^{みづをあら}汝身^{なれみ}、即^{すなは}取^と其水門之蒲黄^{そのみづかどのよもぎ}、敷散^{しきさん}而^を、輒^{さか}転^{ころ}其上一^{そのうへ}者^{もの}、汝身^{なれみ}如^{ごと}レ本膚^{もとく}必^{かならず}差^さ。故^{ゆゑ}、為^なレ如^{ごと}レ教^{けう}、其身^{そのみ}如^{ごと}レ本也^{もとなり}。此稱羽之素菟^{このいばのうそ}者^{もの}也^{なり}。於^{こゝ}今者^{いま}謂^い菟^う神^{かみ}也^{なり}。故^{ゆゑ}、其菟^{そのう}白^{しろ}二大穴牟遲神^{おほあなむぢのかみ}一^{ひと}此八十神者^{このやそかみは}、必^{かならず}不^なレ得^え二八上比売^{やがみひめ}一^{ひと}。雖^{いへ}負^おレ帛^{ふく}、汝^{なれ}命^{めい}獲^とレ之^{これ}。於^{こゝ}是^{こゝ}、八上比売^{やがみひめ}答^{こたへ}二八十神^{やそかみ}一^{ひと}言^い「吾^{われ}者^{もの}、不^なレ聞^{きこ}二汝等^{なれら}之言^{ことば}一^{ひと}、將^{まさ}嫁^{よめ}二大穴牟遲神^{おほあなむぢのかみ}一^{ひと}」。

「物語」——キャラクターたちによるアクシヨンの有機的連続体（志水 2020 Comment (2)）——は、「其八十神各有欲婚稲羽之八上比売」を起点とする。直前に「故此大国主神之兄弟八十神坐然皆国者避於大国主神所以、避者」とある箇所は、この物語の性格を「所以者」によって規定する性格をもつ文字列で、「皆国者避於大国主神」はこの先の所謂「根之堅洲国訪問譚」中の「故持其大刀弓追避其八十神之時每坂御尾追伏每河瀬追撥而始作国也」と「避」字を介して直結し、これを終点とする。このエピソードは、この起点と終点とを結ぶ軸線上に展開される物語の発端にすぎない。かつ終点が「故始作国也」で終るのであれば、ここまでの箇所は「大国主神」を主人公として、彼がはじめて国を作るに至った過程を語る——説明する——機能が与えられている物語であると定位することができる。

さらに起点部分の前の文字列「大国主神亦名謂大穴牟遲神」亦

名謂葦原色許男神亦名謂八千矛神亦名謂宇都志国玉神」并有五名」(「は音註挿入箇所」)が、このエピソードの主人公を説明する文字列として機能しているから、その前の、

故、其櫛名田比売^{みづなひめ}以^{もつ}、久美度迹起而^{くみどあとおこ}、所^{そこ}生^う神名^{かみのみな}、謂^い二八嶋士奴美神^{やまじぬめのかみ}、自^{みづかど}下^{くだ}三^{さん}以^{もつ}。又^{また}娶^{めと}二大山津見神^{おほやまつみのかみ}之^の女^を、名^な神^{かみ}。大市比売^{おほいちひめ}、生^う子^こ。又^{また}娶^{めと}二大山津見神^{おほやまつみのかみ}之^の女^を、名^な神^{かみ}。八嶋士奴美神^{やまじぬめのかみ}、娶^{めと}二大山津見神^{おほやまつみのかみ}之^の女^を、名^な名^な花^{はな}知^ち流^{りゅう}。比売^{ひめ}、生^う子^こ。布波能母遲久奴須奴神^{ふはのぼろひめ}。此神^{このかみ}、娶^{めと}二淤迦美神^{おほやまつみのかみ}之^の女^を、名^な日^ひ河^か比売^{ひめ}。生^う子^こ。深淵之水^{ふかぶちの}夜^よ礼^れ花^{はな}神^{かみ}。此神^{このかみ}、娶^{めと}二天^{あめ}之都^の度^の聞^{きこ}泥^ぬ上^の神^{かみ}。自^{みづかど}下^{くだ}五^ご。生^う子^こ。淑美豆奴神^{しゆみづぬのかみ}。此神^{このかみ}、娶^{めと}二布怒豆怒神^{ふぬづぬのかみ}之^の女^を、名^な布帝耳上神^{ふてみのかみ}。生^う子^こ。天之冬衣神^{あめのふゆのかみ}。

からの連続によって主人公が速須佐之男命からの系譜上に定位されることになる。そしてこの系譜に見える「大天神」の系譜が大国主神をメインキャラクターに据えた物語群を越えて置かれているところから主人公と大天神は速須佐之男命の筆頭系譜内のキャラクター——八嶋士奴美神の系譜——と第二系譜内のキャラクター——大天神の系譜——という次元で等価におかれ、「大穴牟遲命(大国主神)の物語群」を第一系譜内の挿入エピソードという位置にあると把握することができる(志水 1997)。

発端となるこのエピソードには、八十神、稲羽之八上比売、大穴牟遲神、菟、海和迹というキャラクターが登場する。これらの中で物語を展開させるアクシヨンの行為者として中心にいる——アクシヨンを示す単語量が最も多い——キャラクターは菟なの

で、ここを「稲羽之素菟譚」と呼んで括る。

稲羽之素菟譚は八十神が稲羽之八上比売に求婚に出かけるところから始まっている。この求婚活動は「於是八上比売答八十神言吾者不聞汝等之言将嫁大穴牟遲神」で決着がつく。八十神——主役——と稲羽之八上比売——ヒロイン——とを基軸とする語りの次元、これを「八十神の物語線」——「物語（ストーリー）」をキャラクターとアクションとの有機的連続体としたときに、視点と定めたキャラクターのアクションの連続を「物語線」と呼ぶことにする（志水 2020）——とする。八十神の物語線はさらに続いて所謂「大穴牟遲神の死と再生」の物語に展開するが、八十神の物語線を稲羽之八上比売の物語線——八上比売を主役とする物語線——と結びつけたとき、八十神と稲羽之八上比売とからなる物語枠——アクション連続の有機性が、関連するキャラクターの物語線と結びついて集合体となっている文章——が成り立つ。この推進力となるキャラクターが登場し、「故其菟白大穴牟遲神此八十神者必不得八上比売雖負俗汝命獲之」で退場する。菟を主役とする物語線である。

八十神と稲羽之八上比売とからなる物語枠の発端に対応する終結部が、

故、持^も其^{その}大^た刀^た弓^{ゆみ}一^{ひと}、追^お二^{ふた}撥^は其^{その}八^{やち}十^{じゅう}神^{しん}一^{ひと}之^{とき}時^{とき}、每^{おの}二^{ふた}坂^{さか}御^お尾^み一^{ひと}追^お伏^ふ、每^{おの}二^{ふた}河^か瀬^せ一^{ひと}追^お撥^は而^を、始^はレ作^{つく}レ国^{くに}也^{なり}。故^ゆ、其^{その}八^{やち}上^{じやう}比^ひ売^め者^{もの}、如^{ごと}二^{ふた}先^{せん}期^き一^{ひと}美^み刀^た阿^あ多^た波^は志^し都^と此^こ七^{しち}也^{なり}。故^ゆ、其^{その}八^{やち}上^{じやう}比^ひ売^め者^{もの}、雖^{いへども}二^{ふた}率^{そつ}来^{らい}ト一^{ひと}、畏^{かしこ}二^{ふた}其^{その}適^{あて}妻^{めかけ}須^す勢^せ理^り毘^ひ売^め一^{ひと}而^を、其^{その}所^{ところ}レ生^う子^{めこ}者^{もの}、

刺^き二^{ふた}扶^ほ木^も保^{たに}一^{ひと}而^を返^{かへ}。故^ゆ、名^な二^{ふた}其^{その}子^こ一^{ひと}云^い二^{ふた}木^き保^{たに}神^{しん}一^{ひと}。亦^{また}名^な謂^{いは}二^{ふた}御^お井^い神^{しん}一^{ひと}也^{なり}。

の箇所、前半で八十神の物語線を大国主神の「始作国」の由来譚の中に回収し、後半では稲羽之八上比売の物語線を系譜に回収して御井神の由来を説く形で完結させている。ここに挿入されている「畏其適妻須世理毘売」が次の所謂「八千矛神の神語」の物語への伏線となっている。すなわち「畏其適妻須世理毘売」の理由説明として「其神之適后須勢理毘売命甚為嫉妬」が共鳴し、大穴牟遲神の他の女との関係が「八千矛神」の名で語られ、適后から八千矛神への献杯をもって、大国主神——歌謡詞章に「わがおほくにぬし」とある——の「至今鎮座也」で締め括られる。こうして「大国主神」の由来の物語が完成する。この鎮座を待つて「始作国」の具体的営為の物語が発動するのである。

以上、物語線から見た大国主神関連物語群の構成を図式化する

と図のようになる。

日本書紀神代卷は、本伝——本来割注であつた所謂「異伝」ではない本文のこと——は図の○の箇所を語り「大国主神」は登場させていない。異伝では図の「大己貴神」を行為者として語るので、古事記のように「大国主神」の由来を語る余地はない。逆にそこから大穴牟遲神に「大国主神」という属性を付与するのが古事記が語る世界の特異点だといえる。とりもなおさず日本書紀は国の主となる神を認めていないことになる。つまり世界観が違う。

○速須佐之男命の王権獲得の物語（「茲大神」の由来）

(速須佐之男命第一系譜)

「大國主神の由来」

癸端

八十神の物語線
八上比売の物語線

死と再生

八十神の物語線

根の国訪問

大穴牟遲神の物語線
須勢理毘売の物語線

結末

八十神の物語線
八上比売の物語線

鎮座

大穴牟遲神の物語線
須勢理毘売の物語線

大国主神の業績

大穴牟遲神の物語線

〔大國主神の系譜〕

(速須佐之男命第二系譜)

○吾勝正勝勝速日天之忍穗耳神の御世の物語（國譲り神話）

このような構想のもとにある稲羽之素菟譚の物語線を捌いていく。

二、菟の物語線

稲羽之素菟譚は二層に分かれる。一層を「菟が語る物語」、もう一層を「語る菟の物語」と名づけて区分し話をすすめる。

「語る菟の物語」は、状況説明として「其八十神各有欲婚稲羽之八上比売之心其行稲羽時於大穴牟遲神負岱爲從者率往」——物語線を明確に示すために行為者をS（s）、アクションをV（v）で傍示しておく——が前置される。この箇所は、以下の物語でアクションが生じた時点を「時」字で設定する前半と、のちに起動する大穴牟遲神の物語線のキャラクター紹介文の性格を持つ後半（s—v）——とからなる。そして、「於是到氣多之前時裸菟伏也」と菟が裸体——菟の姿を描写する「裸」字は古事記では孤例である——で登場する。これに続く文字列「尔八十神謂其菟云汝將爲者浴此海塩当風吹而伏高山尾上」——傍線によつて會話文が會話主体の物語線と語りの水準を異にしていることを示す——は八十神を主語とするので八十神の物語線の上にあるが、この情報を踏まえて、「故其菟從八十神之教而伏」と展開——V↓の有機的連続（八十神の物語線と菟の物語線とによる物語枠が生成される——し、その結果、「尔其塩随乾其身皮悉風見吹析」という状況になる。

続く、「故痛苦泣伏者」は前文をうけた菟を主体とする描写である。そして、「最後之来大穴卒遅神見其菟言何由汝泣伏」という出会いがあつて、「菟答言」で《菟の語る物語》——全編會話文である——に展開する。その後「故為如教其身如本也此稻羽之

素菟者也於今者謂菟神也」で「語る菟の物語」の水準に戻り、「故其菟白大穴牟遲神此八十神者必不得八上比売雖負岱汝命獲之」とあるのが菟の物語線での菟の最後のアクションである。このアクションで示されるのは大穴牟遲神への未来予言であり、その結果「於是八上比売答八十神言吾者不聞汝等之言將嫁大穴牟遲神」と展開して、これを転機に八十神による大穴牟遲神相手の迫害の物語が生成されてゆく。

転機箇所は、冒頭の「其八十神各有欲婚稲羽之八上比売之心共行稲羽」の結果であり、八十神の物語線と稲羽之八上比売との物語線とによる物語枠に回収される。よって菟の物語線には、菟に対する八十神の姿勢と大穴牟遲神の姿勢との対比をもつて稲羽之八上比売の発話行為——八十神からの求愛に対する拒絶回答——の動機を示す説得機能——キャラクターの意志としてではなく物語線上要請される——が与えられていると見ることが出来る。これが「古事記における稲羽之素菟譚の作品的性格」である。

菟の会話文であるところの「菟の語る物語」は、菟が発話主となるので基本的に菟を行爲の主体とする物語線が構築される。

まず「僕在淤岐嶋」とキャラクター紹介がなされ、「雖欲度此地無度因」は以下に展開される物語の動機——「欲」についての具体的行動として以下のアクションが生成される——としての性格をもつ。

「故」から始まる以下の展開はまず「欺海和迹言」でさらなる会話文「吾与汝競欲計族之多少故汝者随其族在悉率来自此嶋至于氣多前皆列伏度尔吾蹈其上走乍読度於是知与吾族孰多」を生成す

る。これをうけて対話者「海和迹」が行爲主体となつて「見欺而列伏」となるが「之時」によつて括られ、続く「吾蹈其上読度来」という菟の物語線内の状況説明としての性格が与えられる。

次の「今将下地時」も菟が「吾云汝者我見欺」と発話した時点を設定する状況説明だが、すぐに和迹が「言竟即伏最端和迹捕我悉剥我衣服」と、「捕」「剥」二つのアクションを得る。このエピソードにおける和迹の物語線は「見欺」「列伏」「捕」「剥」という四つのアクションで完結するが、すべて菟との関わりの中にある和迹の物語線は菟の物語線に従属している。つまり和迹は脇役にすぎない。

そして菟が和迹の行爲によつて「泣患」ていたところ、八十神に会い、その教えの通りになると、「我身悉傷」ということになった。次に大穴牟遲神が菟に対処法を教え、物語線は「語る菟の物語」に帰属する。

「菟の語る物語」は和迹に「衣服」——古事記でこの熟語は菟のほか、少名彦名神と佐保比売、秋山之下水壮夫、葛城山の神に用いられている——を剥かれ「裸」となり、八十神と出會つて「痛苦泣伏」すことになつて大穴牟遲神の前にいる菟の現状についての説明である。「語る菟の物語」は「裸菟」から「身如本」となりそれを「素菟」と呼称するという軸で生成される。「裸」も「素」も古事記では孤例なので——「裸」は萬葉集でも用いられていない——訓は定め得られないが、この流れからいえば「素」をシロと訓ずることにはためらいがある。

以上のように稲羽之素菟譚は物語線の収束点から見、稲羽之

八上比売と大穴牟遲神との婚姻の話——言い換えれば大穴牟遲神から御井神に流れる系譜の説明（系譜叙述と物語叙述との〈壓縮／延伸〉関係については志水 2002）——の叙述内容に必然性を与える物語であり、それは八十神の物語線への導火線として機能しているのだと図式化される。

三、菟の属性

以上はキャラクターのアクションに注目しての観察であった。次はキャラクター——菟——の属性についてだ。

菟の物語線において「菟」は「裸」で登場する。これは和迹によつて「衣服」を「剥」かれた結果である。

興味深い点は「菟」を動物として解釈した場合、なぜ「皮」——古事記ではアシカの場合「美知皮」と表現している（上巻海宮訪問譚）——あるいは「毛」——「山佐知」として「毛毳物・毛柔物」の用例がある（上巻「海さち山さち」譚。なお他の用例はすべて仮字として用いられている）——としないのかというところにある。

菟の物語線に即して確認したい。

〈語る菟の物語〉で菟が初めて登場する場面である。

於是、到氣多之前時、裸菟伏也。

ここで菟は「裸」という状態で示される。菟は伏しているだけだ。その菟に八十神が「汝將為者」として「浴此海塩、当風吹而、伏高山尾上」の三つのアクションを与える。その結果、「尔其塩隨乾其身皮悉風見吹析」という事態に陥る。ここには「（身）

皮」とある。

これを原因——「故」で受ける——として、「痛苦泣伏」という状況に展開する。その状況説明が〈菟の語る物語〉となる。ここでは「裸菟伏」という状況になった理由として、「伏最端和迹捕我悉剥我衣服」と示される。

八十神に遭遇したときの様子は、「因此泣患者」と示される。この「泣患」は「悉剥我衣服」を「此」字で受けて「因」としてゐるから衣服を剥かれたことで泣いていると理会される。次に、大穴牟遲神と邂逅したときの菟の状況は、八十神の教えの通りにした結果、「我身悉傷」「痛苦泣伏」という様子であった。ここでは身皮の痛みで泣いている。

菟のアクションであるふたつの「泣」には八十神と遭遇したときと大穴牟遲神と邂逅したときとの間で位相が認められる。よつて物語線上、八十神は菟を苦しめる存在——大穴牟遲神に倍を負わせ、望みが満たされなくて迫害する属性を持つキャラクターつまりイジメ役——と性格づけられる。神田 2009 が「意地悪を讀みとらせるという仕掛けが機能するようにできている」とする通りである。

菟は、和迹によつて衣服を剥かれ、八十神によつて身の皮を傷つけられ、大穴牟遲神によつて蘇生するキャラクターである。この三段展開は、焼かれた大石を抱きとめて焼け死に、木に挟まれ埋もれ、最後に異郷訪問して試練をこなした宝物を奪取して大國主神となる大穴牟遲神の物語線の話型と、スケールの差はあれ、同展開である。このとき菟の物語線の最終句が「於今者謂菟神也」

となって神格を得ていることに注目するならば、大穴牟遲神がその物語線で大国主神となるように、菟はこの物語線で菟神となったと解釈される。言い換えれば稲羽之素菟譚は「菟神」の由緒譚でもある。

神は人型をとる。

たとえば古事記中巻での三輪山の神は鍵穴を通りぬけ、日本書紀では蛇体を見せる。だが活玉毘売の目には麗美^{イケメ}壯夫^{メシ}としてあらわれ、やがて懷妊する展開からすれば人体による男女結合が行われたように語られている。上巻で豊玉毘売命は八尋和迊の姿（本国之形）を見せる。ならば稲羽の菟神も人型に形象を想像してよいはずだ。そこに「裸」「衣服」の語が用いられる蓋然性を求めることができる。菟は「天班馬」のように動物として剥かれたのではない。人のように衣服を剥かれたのだ。

ちなみに菟の衣服を剥いたのは和迊であった。和迊とはいかなる生命体か、サメかワニか諸論百花——神田1983に整理がある——だが、菟を人型とし、その衣服を剥く以上、和迊も人型と考えていいだろう。ここでは和迊は神とされていないが、のちに八尋和迊として海神のむすめが登場する。その眷属として——わざわざ「海和迊」と紹介されている——物語の中では人型の形象——豊玉毘売命のケースを考えれば女性像でもいいかもしれない——で理合していいだろう。そもそもサメのヒレではウサギの衣服は剥けまい。

語りは具体的な動物の映像を要求してはいない。

菟神の由緒譚として稲羽之素菟譚を理合するとき、菟は自分に

ついて大穴牟遲神に「僕在淤岐嶋雖欲度此地」と語っている。「此地」は稲羽であるが彼——または彼女。「僕」は古事記では多くの場合男性の一人称だが、下巻では口日売と赤猪子が一人称として用いている——はなぜそれも稲羽に惹かれたのか。菟の物語線の結末は「稲羽之八上比売」と紹介されるキャラクターについての話題である。淤岐嶋の菟が「稲羽之素菟」という名を得る結末を持ち、ここに個体名として「稲羽之」が冠されている共通項を見出せば、八上比売と菟との「稲羽」の地を介しての強いつながりがうかがえる。そして「稲羽」に視点を置くと、菟は「淤岐」——神田2011が「沖合にある島を意味するのがふさわしい」とする通り、物語は必ずしも地域名「隠岐」を要請していない——の嶋から稲羽之八上比売のもとへの来訪者という性格をもつことになる。

海を渡る手段として菟は海和迊を欺く。〈菟の語る物語〉の前半はどのように欺いたかを説明する。そして「今將下地時」に菟は「汝者我見欺」と云う——現代娯楽作品で悪役が問われもしないのに主人公の前で悪事得意げに披露する型の粗型をここに見出せて興味深い——。菟は衣服を剥かれるまでは「欺く者」という属性が持たされている。衣服を剥かれて「泣患」中、八十神のことばに従い「身皮」を傷める。これは「欺かれた」とは示されていないが、八十神のことばは菟にとって「患」を癒す方向性が期待されていたと読み取ることくらいは許されるだろう。それが裏切られる。菟の属性は稲羽に着くや「欺く者」（加害者）——対する被害者の和迊に実害はないが——から「欺かれる者」（被

害者——菟は暴力的被害を受ける——）に反転する。

海を境界に淤岐嶋と此地とを置き、越境して属性が反転するのは古事記の物語の〈お約束（志水 2012）〉に適う。高天原で天つ罪を犯す速須佐之男命は越境して出雲に降り国つ神のむすめを喰らう蛇を退治して「大神」となる。全く主体性のない大穴牟遲神は根之堅洲国に越境し「大国主神」となる。兄神に圧迫された火遠理命は海神宮を訪問して立場を逆転させる。これらの話型は成人儀礼と結びつき、折口信夫の示した「貴種流離譚」の構造を持つ。古事記の「王権の書」としての不可欠な話型だが（志水 2009a）、稲羽之素菟譚もその枠組みの中にあるといえよう。要するに菟が神となる物語なのだ。

結語

〈いま目になっている物語〉に対して〈どのような物語か〉という小さな問いを立てたとき、「物語とはなにか」という前提に向かいあうことになる。しかし「物語とはなにか」という大きな問いにいきなり真正面から向かうのは、大切なことではあるが、原義から方法論まで膨大な先行する言説があふれ、たやすく不毛な論議に陥る。ここではその危険を避け、作業手順としてまず「物語」をその可視的現場すなわち文章表現の次元でとらえ、次に具体的に文——主語述語関係——を基軸として構築される単語間の体系と定め、その体系を構築する関係性から行為者（主語）と行為（述語）によって括られる言説構造を物語線として図式化した。これで「物語」を複数の物語線が行為によって結びつく行

為者たちによる体系的な集合体の姿に整理できる。その上で物語線を構築する要素の属性を体系性の上に見出すよう試みた。これはいうまでもなくプロップ流の話型分析の用いる方法とレヴィ・ストロースまたエリアーデ流の性格付けの方法をバルトのテクスト論の援用の上に展開させたものである。

以上、古事記の稲羽之素菟譚にこの方法を用いて自分なりの物語論を試みた。見えたものは、稲羽之素菟譚とは菟神について説明する物語であり、それは神に成る話として古事記の基調を作っている話型の範疇にある。そして大国主神誕生の物語の発端として機能する物語という様相である。だがこれは研究の基礎的作業として作品の設計図を描いたにすぎない。

真の物語はきっとこの先にある。

註

古事記における漢字表記のあり方と音註施注の法則に依り地域名「隠岐」と解釈するのが一般的であるが——神田 2011 に学説の整理がある——その依拠している二件が、古事記本文が太安萬侶自身の意識的表記行為——西條 1990 のいう「太安万侶書き下ろし」——であることを前提としている。その前提に疑義を持つので（志水 2004）地域名とする解釈には従わないし、その問題にここで分け入ることはしない。「淤岐」には志水 2009b で示した古事記のもつ言語遊戯性——太安萬侶の理解しえない、あるいはあえて理解しないもしくは認めない表現領域（志水 2009c）——から見ればこ

こも「沖」でありつつ「隠岐」もしくはその逆——音声の生む映像の多重性——であろう。

Text

真福寺本本文は桜楓社（おうふう）刊の写真版、兼永筆本は勉誠社（勉誠出版）刊の写真版を用いた。

Reference

- 神田 1993 神田典城「ワニ」小考』『記紀風土記論考』2015、新典社。
- 神田 2009 神田典城「稲羽の素菟考——医療行為の側面から——」『記紀風土記論考』2015、新典社。
- 神田 2011 神田典城「淤岐嶋」考』『記紀風土記論考』2015、新典社。
- 西條 1990 西條勉「古事記は、だれが書いたか」『古事記の文字法』1998、笠間書院
- 志水 1997 志水義夫「大年神系譜の考察」『古事記生成の研究』2004、おうふう。
- 志水 2002 志水義夫「国生み神話の構造と生成」『古事記生成の研究』2004、おうふう。
- 志水 2004 志水義夫「稗田阿礼の仕事・太安万侶の仕事」『古事記生成の研究』2004、おうふう。
- 志水 2009a 志水義夫「Ⅰ 古事記、神話への知的冒険——上・中巻で構造論——」『古事記の仕組み—王権神話の文芸—』

2009、新典社。

志水 2009b 志水義夫「Ⅱ 古事記」the Entertainment——中・下巻で表現論——』『古事記の仕組み—王権神話の文芸—』2009、新典社。

志水 2009c 志水義夫「Ⅲ 古事記2007、あの人たちの戦場——序文で成立論——」『古事記の仕組み—王権神話の文芸—』2009、新典社。

志水 2012 志水義夫「鈍漢論—ライトノベル（ツンデレ物）の『約束—』」2012『湘南文学』46。

志水 2020 志水義夫「アニメ『ゾンビランドサガ』の仕組みと作品的性格（メディア文藝小攷Ⅳ）」2020『湘南文学』55。

鈴木 1983 鈴木啓之「古事記「稲羽之素菟」訓義攷——「素」字の使用意義をめぐって」1983『古事記年報』31。

本居 1803 本居宣長「訂正古訓古事記」享和三年1803刊。

度会 1687 度会延佳『鼈頭古事記』貞享四年1687序。

（しみづ・よしを 本学教授）

——さよなら。亡父の教え子の泰恵姐さん。